四国防災八十八話

第四十八話　おろよ、おろよ

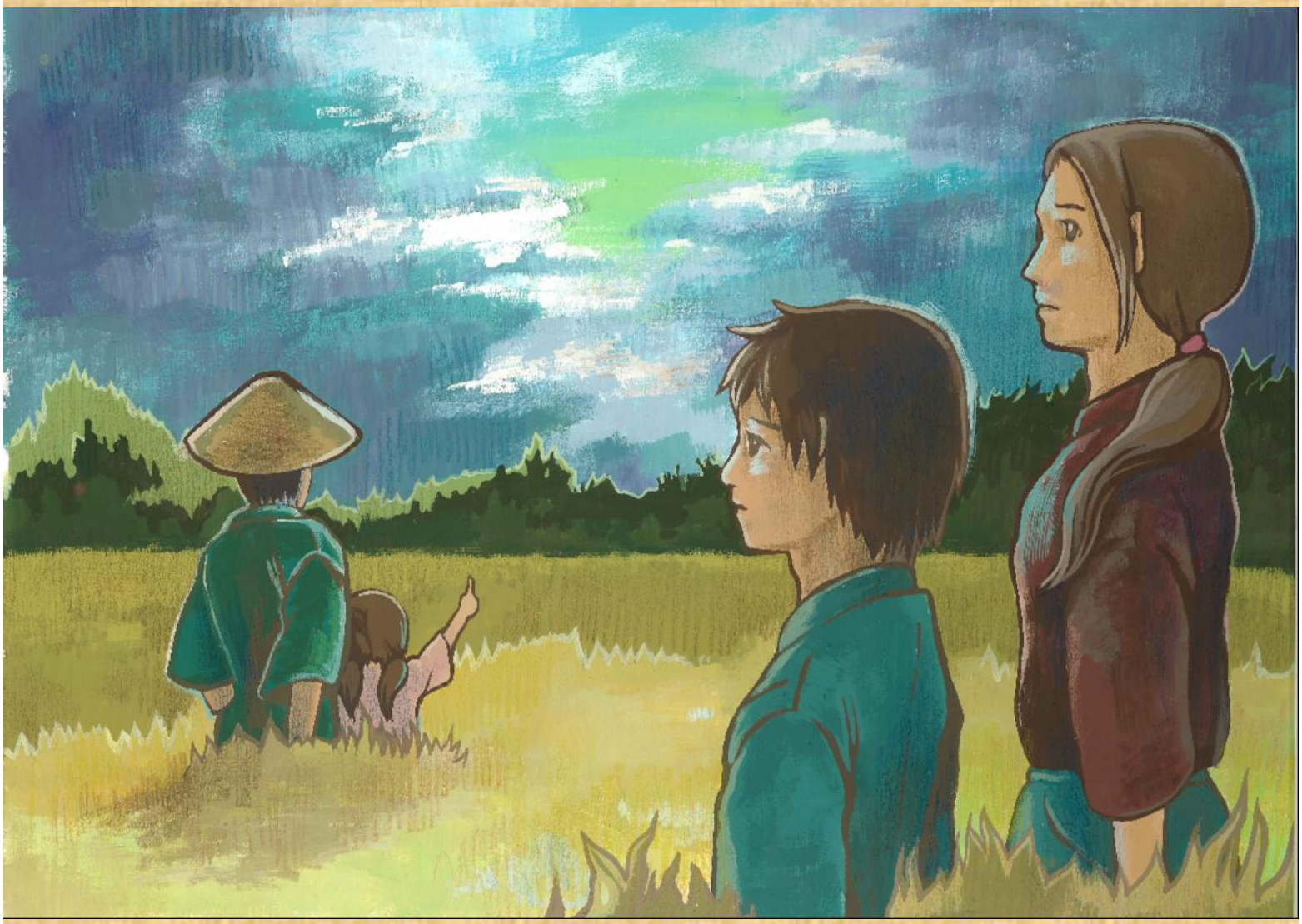
監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター
作画：村上　美樹（愛媛大学美術研究会）

今から100年以上前のこと。

高知県の四万十川という川でのお話です。

9月のはじめ頃、その年の稲は大豊作で、皆は大喜び。

豊作を祝うお祭りの準備に大忙しです。



ところが、祭りの準備も進んできたある日、

なにやら向こうの空の様子がおかしくなってきました。

「不気味な雲だなぁ」

「嫌な予感がするね・・・」

夏の初めからずっと晴れていた天気が急に変わって、

皆とても不安になってきました。

とうとう、夕方になると、皆が思っていた通り、
雨が降り始めました。
その雨は止むどころか、だんだん激しくなり、
ついには大雨となりました。
四万十川の水かさも増えて、瞬く間に低い土地から水に
浸かっていってしまいます。

お米を育てていた人たちは、

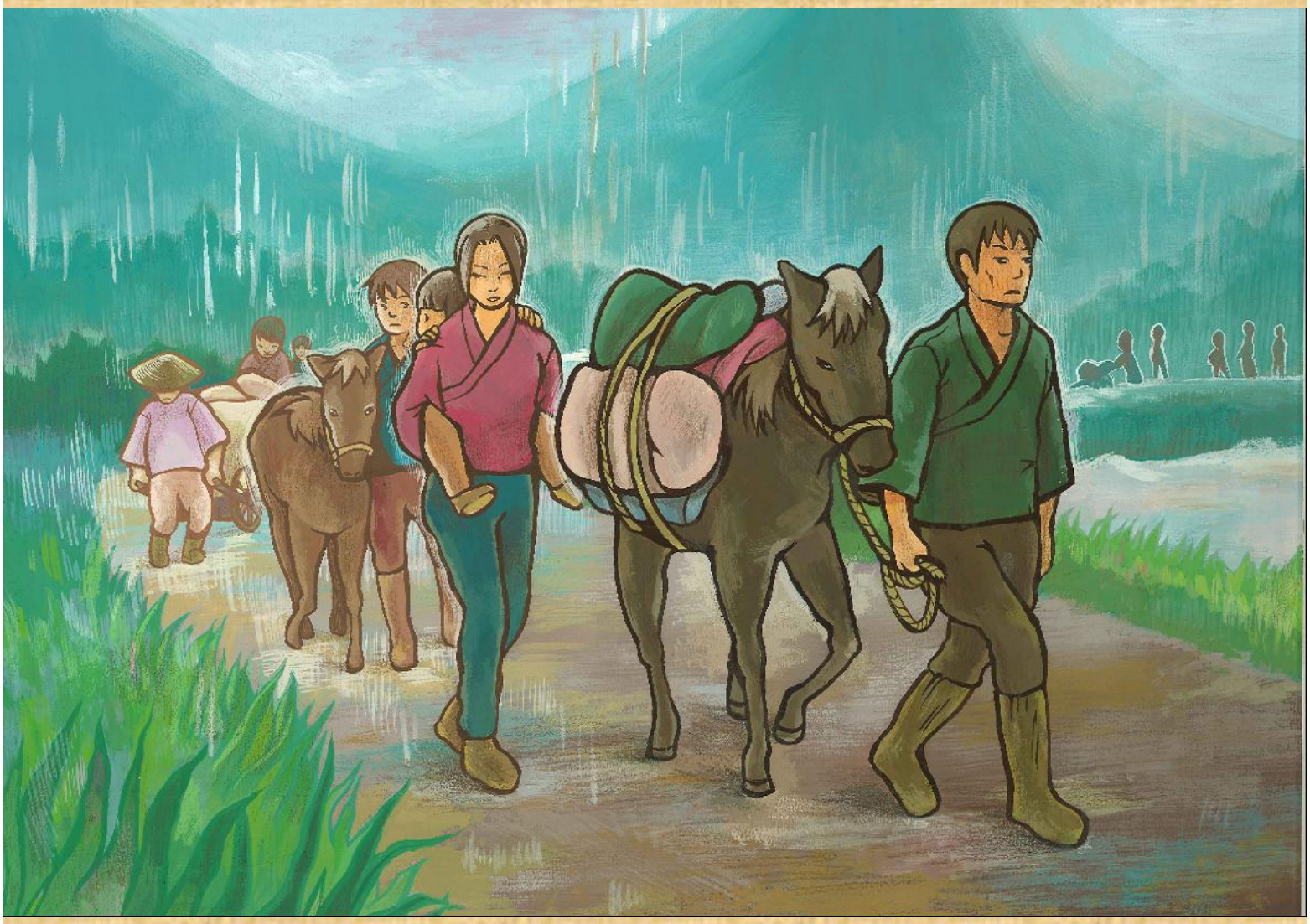
すっかり水に浸かってしまった稲を見て、涙を流しました。

「せっかく育てたお米が、台無しになってしまった･･･」

「あんなに豊作だったのに･･･」

しかし、それを悲しんでいる暇はありません。

今は自分たちの身を守らなくてはならないのです。



皆は、万が一に備えて避難をし始めました。

低い土地に家を持つ人は、家の中のものを運び出し、

高台にあげました。

牛や馬も避難させます。

大雨の中、皆必死に頑張ります。

やっと荷物を運び終え、ほっと息をついたその時です・・・

バシャーン!!!

と大きな音がしました。

皆が音のした方を見ると、

何と繋いであったはずの子馬が、泥水に足を滑らせて

川へ落っこちてしまっていたのです。

子馬は訳が分からず必死にもがいています。

四国防災八十八話～第四十八話　おろよ、おろよ

「大変だ!!」「おろが落ちた!」

この辺りでは、馬のことを『おろ』と呼んでいて、

人々は、「おろよ、おろよ」と呼びかけ、連れ戻そうとします。

「おろよ～!!こっちだよ～!!」

「おろよ～!戻っておいで～!」

皆、声を振り絞って呼びかけますが、

子馬は皆の声に気づかず、流されて行くばかりです。

「泳いで行って引き上げよう」

そう言って、泳ぎの得意な人が川に入ろうとしましたが、

あまりの激しい濁流に中に入ることすらできません。

「これでは無理だ・・・!」

どうしようもなく、結局人々は「おろよ～!」「おろよ～!」

と呼ぶことしかできません。

その時・・・・!!

「ヒヒーン!!!」

大きな、大きな鳴き声が響き渡りました。

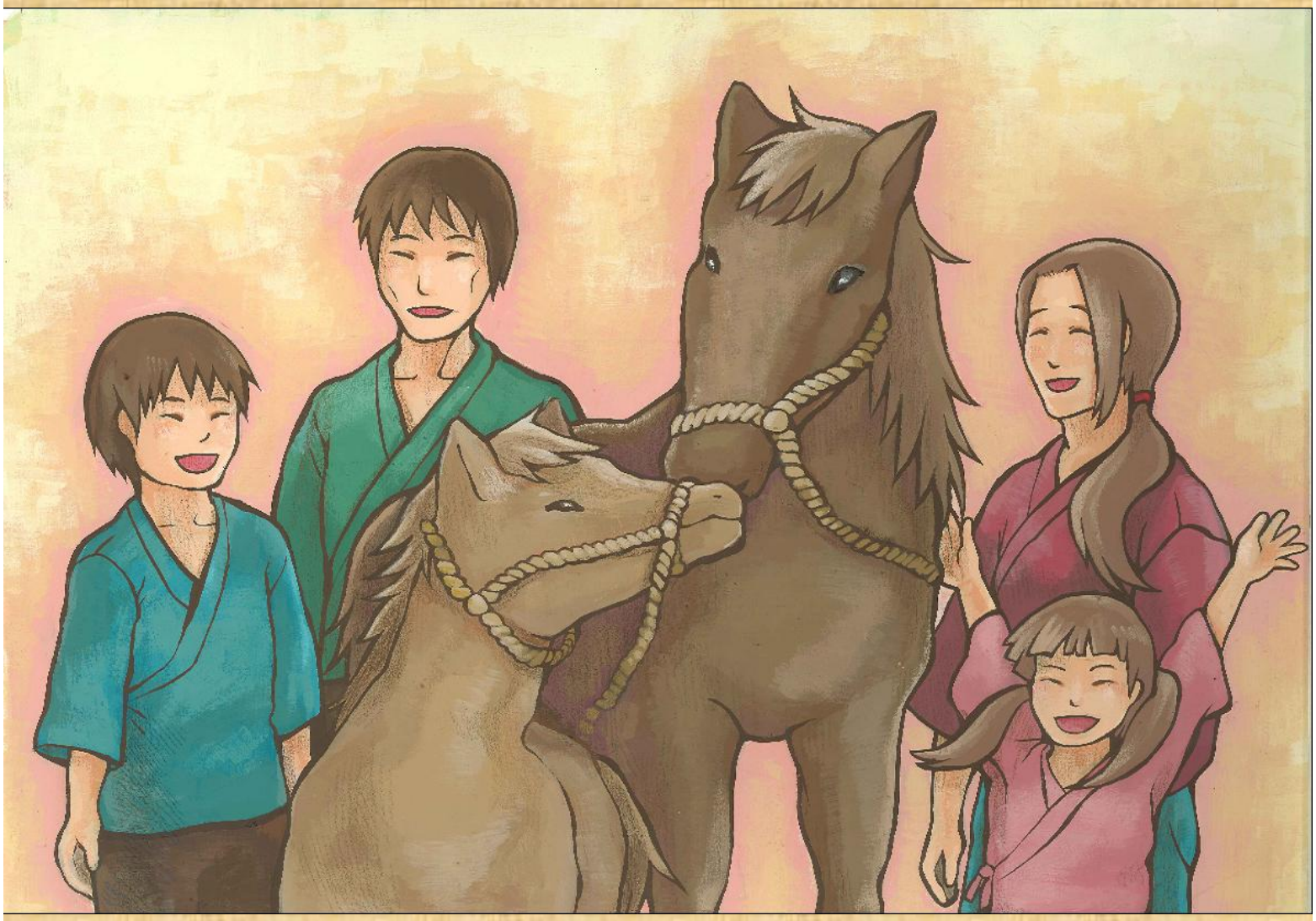
子馬のお母さんです！

皆はその声の大きさにも驚きましたが、

その後もっとびっくりしました。

なんと、子馬がこちらへ自分で泳いでくるではありませんか!!

お母さんの声は、子馬にしっかりと届いたのです。



子馬は一生懸命泳ぎ切り、やっと岸まで辿り着きました。
お母さん馬は子馬に寄り添い、長い舌で舐めてあげました。
その様子は、まるで、「よく頑張ったね、心配したのよ･･･
無事で良かった･･･」と言っているようでした。

この馬の親子の姿を見て、皆はこの嵐を支え合って
乗り越えようと、家族の絆を深めたそうです。
日頃の家族の絆，地域の絆が
災害を乗り切る力の源なのです．